

ソウル「南山講学院」にみる新しいコミュニティの形

A new form of community in Namsan ganghagwon, Seoul

松井 真之介

Shinnosuke MATSUI

I はじめに

本研究ノートは、韓国ソウル市の南山地区にある「南山講学院」に関して、2014年12月、2015年12月の2回にわたり参与観察を行い、日本において一般にはほとんど知られていない¹コミュニティの概要および現状を報告するものである。

まず、「南山講学院」という「コミュニティ」とは何か、簡単な説明が必要であろう。このコミュニティの性格をひとことで表すと「学術コミュニティ」、もう少し活動内容に即した言い方をすれば「人文学コミュニティ」ということができるだろう。大学などのいわゆるアカデミア制度の外で、哲学、文学、社会学などの人文学にまつわる問題意識をもつ者たちが、ソウル中心地にほど近い南山の麓の建物に集まり、食事など生活をともにしながらセミナーや共同研究を続けている。個人的な印象では、日本の大学でしばしば行われる大学教員と大学生の「ゼミ合宿」²と、公民館などで一般人を対象に行われる「カルチャースクール」、「カルチャーセミナー」「カルチャーセンター」などに類似する点がある。あるいはそれらの延長線上にあるものともいえるだろう。ならば、南山講学院を何も「特殊なコミュニティ」と捉えずに、カルチャーセンター、学校、塾の類で説明できないものだろうか。

II 南山講学院は学校、塾、カルチャーセンターと言えないのか？

南山講学院は一般向けセミナーを開講している点で、カルチャーセンター的な役割は確

¹ 南山講学院を報告者に紹介し、2回の現地調査の手はずをコーディネートしたコミュニティ研究者の田恩伊によると、韓国本国においてすら一般的にはあまり知られていないという。

² 「ゼミ合宿」とは、大学教員にもよるが、大学の休業期間にゼミ生を集めて安価な旅館や合宿所に宿泊し、飲食や娯楽をともにしながら専門書の読書会や学位論文の進捗発表会、あるいは学会発表のための模擬発表会などの研究会を行う合宿のことと説明できるだろう。同じメンバーによるが、学問を介しないものは一般的に「ゼミ旅行」と呼ばれ、「ゼミ合宿」とは区別されるだろう。

実に持っているが、食事と生活が関わる点でいわゆるカルチャーセンターとの違いがある。正会員は一般向けセミナーにおいてはカルチャーセンターの講師と同じ役割を果たしているが、同時に南山講学院という場と集団に所属し、自分で立てた研究計画に従って研究活動を行っている。この点でもカルチャーセンターとは異なるだろう。

次に、学校に関してであるが、いわゆる「公認の」学校と比較しても、食事と共同生活という点を挙げると、全寮制の学校とかなり類似する点があるが、そもそも南山講学院には学年制度や在籍の年限規定はなく、公的に認められるディプロマ（卒業証書、修了証明書など）を発行するわけでもないの、一般的に言われる学校とは明らかに異なる。では「非公認の」学校という点ではどうだろうか。代表的なものとしては私塾が挙げられるが、トピックに応じて教える側と教えられる側が自由自在に交代できる南山講学院はやはり、教える側と教えられる側が明確に分離している塾とは異なるといえる。

III 南山講学院は「コミュニティ」なのか？

南山講学院は、コミュニティ論研究者の R.M.マッキーヴァーや R.E.パークが主張する古典的な「コミュニティ」定義³にてらすと、「共同性」に関しては要件を満たすものの、やや「地域性」が欠けているため、少なくとも従来定義されてきた「コミュニティ」とは完全には言いがたい。しかし一方で、地域や土地、場所にこだわらない「ゆるやかなコミュニティ」、あるいは地域、土地、場所を全く捨象した「つながり」のみの「情報コミュニティ」、インターネット、サイバースペース上の「バーチャル・コミュニティ」といったものの存在がここ 20 年内でクローズアップされている。これらの新しいコミュニティ概念を含めると、南山講学院は地域性こそ薄い、会員たちは食事をともにし、正会員の一部は近隣のシェアハウスで共同生活を営んでいるという実体をともなった、「共同性」をもつコミュニティといえる。そして、何よりも彼ら自身が「コミュニティ」と自己認識していることが重要だろう。

³ イギリス生まれのアメリカの社会学者 R.M.マッキーヴァー (Robert Morison MacIver) はその著書『コミュニティ』において、「コミュニティ」と「アソシエーション」を比較しており、そこで彼は『コミュニティ』とは『地域性』に基づき、人々の共同生活が営まれる生活圏を指しており、それには村落、都市、国民社会が含まれている。「これに対して『アソシエーション』とは、コミュニティの内部において一定の目的のために意図的に作られた集団を意味している」(『アソシエーション』には家族、教会労働組合、国家などがあげられている(船津衛・浅川達人『現代コミュニティとは何か——「現代コミュニティの社会学」入門』、恒星社厚生閣、2014年、5頁)。一方、アメリカの社会学者 R.E.パーク (Robert Ezra Park) はその著書 *Introduction to the Science of Sociology* において、人間世界を「コミュニティ」と「ソサイエティ」に分け、「コミュニティ」は一定の地域において「共生 (symbiosis)」している人々の集合をあらわし、生態学的秩序によって形成されているとし、「ソサイエティ」は「コミュニケーション」によってできあがっており、経済的、政治的、道徳的秩序によって形成されているとする(船津・浅川、前掲書、6頁)。両者を総合すると「地域性」と「共同性」を特性とする人々の集団であるといえる。

IV 南山講学院の成り立ち

発端は1997年に遡る。韓国国文学の研究者、高美淑（コ・ミスク）が、ソウル郊外の水踰里（スユリ）に勉強部屋を開設する。その動機は「博士学位は取得したものの就職口はない。研究を続けることと、就職のための無駄ともいえる努力。学びの場が大学じゃなくてもいいじゃないか」⁴というものであった。韓国の近代性の起源を研究する韓国国文学者数人で開いた研究会は、その後分野を超えて人が集まり、研究会が増え、拡大し、「水踰研究室」ができあがる。そこに、同じく韓国の資本主義的発展や近代化をテーマとしていたソウル社会科学研究所の社会科学者たち数人が合流する。彼らもまた独立して李珍景（イ・ジンギョン）を中心に「研究空間<ノモ>」⁵を創設しようと構想していた。2つのグループの利害が一致し、1999年、2つの研究空間が統合し新しく「研究空間<スユ+ノモ>」（以下<スユ+ノモ>）として発足することになる。こうして<スユ+ノモ>は、「韓国における近代性」を問題意識の軸とし、研究者の共同研究室（学習部屋）と研究会を兼ねた団体となり、国文学と社会学を中心に講座（公開講義）やセミナーを開催していく。

その後<スユ+ノモ>は会員数や活動の拡大に応じて水踰里から大学路（テハンノ）、鐘路（チョンノ、2005年）、龍山（ヨンサン、2006年9月）、南山（ナムサン、2006年12月）と、10年間で4回の移転をした。この間に国文学と社会学を中心とした多様な学問分野の講義やセミナーを開催し、会費と講座収入による運営システムの構築、会員のニーズから食堂、カフェ、仮眠室、図書館、託児室などの生活共同空間が整えられていく。正会員は最盛期で60名以上、敷地は龍山で300坪、南山で400坪と、単科大学ほどの規模に至る⁶。こうして<スユ+ノモ>は10年掛けて、ポストドクター研究者の共同研究室から研究者や会員たちのコミュニティといえるほどまでに発展したのである⁷。

しかし、大きくなりすぎた規模によって生じる問題と世代交代の必要性、ネットワーク型への構想転換から、高美淑は組織の分化を模索しはじめる。そこに今後団体が目指す方向性の違いをはじめとした葛藤から様々なグループの衝突が重なり⁸、2009年以降<スユ+ノモ>は「スユ・ノモR」、「スユ・ノモN」「人文ファクトリー」などに分化し、水踰研究室に残ったグループが「南山講学院」、「スユ・ノモ南山」に分化、高美淑は「坎以堂」（カミダン）⁹を始める。以上のような過程を経て、今回取り上げる南山講学院は誕生したので

4 金友子編訳『歩きながら問う——研究空間<スユ+ノモ>の実践』、インパクト出版会、2008年、7頁。

5 「ノモ」（너머）とは「彼方」とか「越える（trans）」という意味を持つ。

6 平成25・26年度 東京学芸大学連合学校教育学研究科院生連携研究プロジェクト報告書『生活共同空間としてのコミュニティと文化形成の関係性に関する共同研究』、http://www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/rengou/kyouin/topics/data_project_h25/b-5.pdf（2016年1月29日確認）、9頁。以下、本報告書は単に「前掲報告書」とのみ記す。

7 南山講学院代表文聖煥（ムン・ソンファン）はその講演にて「ある瞬間から研究室は（知識人というより）『共同体』ということがより重要な原則として働くようになりました」と述べている。前掲報告書、20頁。

8 前掲報告書、15-16頁、高美淑の講演記録より。よってこの組織分裂に対する解釈は高美淑個人の視点によるものである。

9 カミダンは南山講学院と「ネットワーク関係」（提携関係）にあり、セミナーの際は南山

ある。

以上、南山講学院の概要、枠組み説明、成立史について触れたが、ここからは報告者が2014年12月、2015年12月に行った参与観察のデータをもとに、南山講学院の具体的な活動内容に触れたい。

V 南山講学院設立の背景と特徴

南山講学院はここで食事をし、生活をする正会員たちが研究するためのコミュニティであるが、それだけではなく、ここで生活する者以外の講義・セミナー参加者を多数募り、広く一般に開かれたコミュニティでもある。ポストドクター集団の研究室から始まった前団体から、このように一般向けの団体へ活動方向をシフトした背景はどのようなものであろうか。

南山講学院現代表の文聖煥（ムン・ソンファン）によると、環境要因、外的要因として「韓国における人文学ヴィジョンの変化」がその活動背景にあるという。1997年から98年におこったいわゆるIMF通貨危機¹⁰に端を発して、経済成長一辺倒の国内状況に不安を持った国民が自分の生き方を根本的に考える礎となる哲学、文学などの人文学に興味を持ち出し、「人文学ブーム」が起こったからだと彼は考える。一方、<スユ+ノモ>創設者で、現在は「坎以堂」を展開する高美淑も、コミュニティ拡大の背景として韓国の「人文学ブーム」に触れているが、彼女はそれを2008年としている¹¹。2008年もその十年前と同様、いわゆる「韓国通貨危機」¹²があり、彼女の言う「人文学ブーム」の背景もやはり経済危機という社会背景と結び付けられるかもしれない。そしてこの「人文学ブーム」に関して2人が共通して言うのは、国民が人文学プログラムを求めるといふ現象が起こり、全国規模で図書館や企業、公民館などで人文学講座が始められ、新聞社がカルチャースクールで人文学講座を次々と誕生させ、隆盛をきわめたということである。アカデミーの人文学からデモクラシーの人文学へ。このような流れの受け皿の一つとなったのが南山講学院であるとしている。

一方、内的要因としては<スユ+ノモ>以来、制度圏内、つまり大学等のアカデミーの人文学を破りたい、知識に対してアカデミーとは別の切り口を開きたい、という会員の意思が連綿と続いていることを文代表は指摘している。高美淑はこの点に関してさらに、「批判的で進歩的な知識人も知識を所有と啓蒙の立場で考えるんですね。ですから私たちは『エリートと大衆の境界』を自分自身の内面で解消しなければなりません」といい、制度圏内

講学院と同じ建物を使っている。

¹⁰ 韓国が通貨危機を経験し、国際通貨基金（IMF）からの資金援助の合意を締結した一連の事件。IMFとの合意内容は「財政再建」、「金融機関のリストラクチャと構造改革」、「通商障壁自由化」、「外国資本投資自由化」、「企業ガバナンスの透明化」、「労働市場改革」というものであった。国内への影響としては、政権交代、大宇財閥の解体、9つの公的企業の民営化などがあった。

¹¹ 前掲報告書、15頁。

¹² 2007年の世界金融危機が発端となって、韓国の通貨ウォンの価値が大幅に下落したことに伴う通貨危機。

の知識のあり方を批判し、知識に対する態度を変えることを問うている¹³。南山講学院現メンバーの申才恩（シン・グンヨン）も、知識人たちの知識「所有」に対する疑問を提示し、大学院で学んだ「所有する身体性」を「循環する身体性」に変えることが自分の個人的な勉強だとしている¹⁴。

このように南山講学院は、アカデミー制度圏外で研究者として究める学問と、民衆に応える学問を同時に模索するコミュニティであるという特徴がある。

VI 「研究共同体」として

6.1 「誰もがアクセスできる人文学」へ

南山講学院は先ほど述べたように、もともとはポストドクターの研究室という「エリートの人文学」から始まったが、その後の「デモクラシーの人文学」の要請という社会状況に応え、「大衆知性」を重視し、今では誰もがアクセスできる人文学を目指していることを特徴としている。では、それはどのようにして実現されているのであろうか。

基本的には、正会員の現在の研究テーマ、得意分野によってセミナーや講義内容は決定される。孔孟思想、老荘思想、陽明学から命理学、易学まで広義の東洋哲学がメインとなるが、マルクス、ニーチェ、サルトル、フーコーなどの西洋思想、夏目漱石、韓国文学などの人文学、そして韓医学、東洋医学、心理学、さらに英語、日本語の講読、あるいは実践的な語学まで多数開講されてきた。

開講形式は主に3つあり、1つが正会員および年間プログラム受講者対象の自主ゼミ的なセミナー、2つ目は正会員が行う、講義形式の企画セミナーである。企画立案者の正会員が参加者を募集し、4人以上の参加者で開講できることになっている。3つ目は、外部講師による不定期の講義である¹⁵。そして、あるセミナーで講師を務めた会員が別のセミナーでは参加者となる。ここには講師と学生・生徒の固定された役割はない。ここにほぼ毎日顔を出し、コミュニティの方向性に対して主要な決定権を持ち、講師を務めることができる正会員と、それ以外の会員として年間プログラム会員、自分の選択したセミナーのみ参加するセミナー会員という区別はあるものの、一般の学校や塾のような、いつも講師であり続ける、いつも学生・生徒であり続けるという関係性はない¹⁶。

また、「大衆の知性化」についても当初とは少し変化してきたことを述べなければならな

¹³ 前掲報告書、14頁。

¹⁴ 同上、22-23頁

¹⁵ 同上、47頁。1つ目の自主ゼミ的セミナーは月15,000ウォン、いくつでも自由に好きなセミナーに参加可。2つ目の企画セミナーは3ヶ月で受講費150,000ウォン。3つ目の講義は講義ごとに月18,000ウォン払う。

¹⁶ ちなみに2014年12月に初訪問した際、報告者は朝9時からの英語（米文学のテキスト）の輪読の講座とその次10時からの日本語（日本のテレビドラマを使った実践学習）の講座に参加したが、参加者たちの要望と同意のもとに、英語輪読では自己紹介の後、報告者の研究分野の紹介を英語で30分ほど行った。日本語の講座では講師役の会員から要請されて最初から日本語の講師として講義をリードした。珍しい訪問者であり、かつ日本語ネイティブであるということもあろうが、これも「誰もが講師、誰もが受講者」精神の一つのあらわれではないだろうか。

い。前述のとおり、おそらく経済危機に端を発する「人文学ブーム」から国民が人文学講座を欲し、南山講学院はその受け皿の一つとなり、「大衆の知性化」に貢献したのだが、それが現在では「大衆自身の知性を活かす方向」へと発展してきているという¹⁷。受講者から講師になるのはその好例であろう。

その講義内容に関しても、学問的正統性よりも「入りやすく、語りやすく」を重視している。もちろん、学問的な「正しさ」をないがしろにしているわけではないが、それを重視するあまり陥りがちな、解釈に関する細かい議論に入ることはなるべく避け、「これを学ぶことによってあなたの何が変化したか。あなたの周りをどう変化させようか」という点の方が大事だという¹⁸。

このことは、年末に会員が提出する「エッセイ」(レポート)に関しても同様である。エッセイもいわゆる大学の学位論文とは異なり、学んだことによる自身の変化、学んだ思想と自身の生活や人生との関わり、それを講義や発表したことによる周囲の変化について書くものであるという。エッセイを提出することによってディプロマを授与されることはないが、年末の学術祭において賞金をはじめとするさまざまな褒章のあるコンテストという形で評価される。ここでは学問の出来・不出来で選ばれることはなく、どのような研究をし、自他どのような変化が起こったかが重視される。ここでの学問は、「選ばれる＝エリート」の人文学ではなく、誰もが平等にアクセスできる人文学なのだ。

6.2 「円座」の重視と「空間の転換」の重要性

南山講学院では、全ての講座ではないが、大部分の講座が広いスペースにあぐらをかいて円座を作って学習するという形式をとっている。机が必要なときは高さ 60 センチほどの鳥居型の木製机を使用する。そして、講師も同じ円座の中に入る。学校や塾、カルチャースクールで一般的に見られる教師用の教壇、教師の方向を一斉に向く学生・生徒・受講者用の机・椅子という「オーケストラ型」配置ではなく、ここでは「室内楽型」配置を重視しているのである。これも教師／学生という役割が固定化された学問環境ではあまり馴染みのないものであろう。しいて言うならば、会議や大学のゼミは椅子を用いた形でこのタイプであるが、南山講学院は椅子なしの形でこのタイプがメインの配置である。「誰もがアクセスできる人文学」を表象していると同時に、会員内の序列を感じさせない、平等性を意識できる興味深い装置だといえるかもしれない。運営会議も同じく円座で開催される。

講座には大抵テキストが必要であるゆえ、簡単に持ち運べる木製の机は用意されているが椅子はない。これは「空間の転換」が重要であるからだ。講座の人数が決まっているわけでもなく、ずっと似たような形式の講座を開くわけでもなく、少人数、大人数、複グループにも対応しやすく、ヨガ道場としても使えるようにと考えた際、椅子の必要性はなかったという¹⁹。報告者のインタビューとは別の講演において文聖煥は「空間で活動する人たちの活動と(空間が)比例する」ことが大事な原則であり、「一つの空間をいろんな形態へ

¹⁷ 2014 年 12 月 11 日、南山講学院代表文聖煥(ムン・ソンファン)氏へのインタビューによる。以下、「文代表インタビュー2014」と記す。

¹⁸ 文代表インタビュー2014。

¹⁹ 文代表インタビュー2014。

と転換させて使用できるようになれば、同じ空間でも幾つもの空間へと変わるし、一つの空間が占領されはじめると、大きな空間も幾つもの死んだ空間を作ってしまいます」と述べている²⁰。高美淑は一つの空間で研究（講義）と生活（食事・余暇）を解決するためには「空間の配置」と「時間の動線」の2つが重要だとする。彼女は共同体の能力に関して、キッチンにおける素早い空間の転換の必要性を語っているが²¹、講座用の部屋においてもやはり同じことがいえるだろう。

6.3 朗読の重視

南山講学院の特色として「朗読の重視」が挙げられる。テキストがあるものはたいてい輪読という形で朗読しながら講座は進められる。黙読で内容を追いながら、講師の説明や解釈を聞いて理解するというよりも、テキストを主体的に発声し、身体と頭脳の両方を使って主体的に理解しようとすることを重視している。特に古典を朗読する講座は南山講学院独自の特色企画であり、例年多数の参加者がある。なぜ「朗読」を重視するのか。それは単なる声を出して読むことだけではなく、朗読することで、朗読の声の波長が届くことで周りを変化させ、特に親子でのセミナー参加者にとっては親子の反応を変化させるという意義を持つという²²。

南山講学院における「朗読」は内容に関する意義だけではない。南山講学院は古典の朗読本を多数（2014年12月時点で28冊）出版しているのである。これが南山講学院の社会的知名度を上げはじめると同時に、コミュニティの重要な収入源となっているのである。また、この出版に向けて編集する会員たちの学習に対するモチベーションが格段に上がったことを文氏は述べている。

6.4 共同研究室＝勉強部屋

南山講学院は、大衆が平等にアクセスできる人文学のスポットとしてももちろん重要だが、何よりもまず会員の研究・学習の場であることを忘れてはならない。南山講学院には個人で、静かに勉強するために共同研究室が設けられている。図書館の一室のような大部屋で、約20席が用意されている。この共同研究室は、同じく机の私的所有・専有を禁止している。なので、自分の勉強が終わったら机の上の道具を片付けて次に使用する人がすぐ使える状態にしておかなければならない。このあたりは一般的な図書館と一緒であるが、単純に南山講学院に出入りする人数との兼ね合いという現実的な問題以上に、過剰な私的所有や私的占領を忌避する精神、あるいはそれを無駄と考える精神が働いている²³。実際、文聖煥は「一つの空間が占領されはじめると、大きな空間も幾つもの死んだ空間を作ってしまいます」²⁴と述べており、高美淑も「私的に消費する領域を減らして、キッチン、カフェ、共同

²⁰ 前掲報告書、19頁。

²¹ 同上、13-14頁。

²² 文代表インタビュー2014。

²³ 文代表インタビュー2014。

²⁴ 前掲報告書、19頁

住宅にする」生活の重要性を説いているし²⁵、申才恩の主張する「『所有する身体』から『循環する身体』へ」、あるいは「分かち合い」の倫理というのもこれにつながってくるであろう²⁶。

VII 「生活共同体」として

そして、本報告においてより重要視するのが「生活共同体」としての南山講学院である。この特徴こそが南山講学院を学校や塾、カルチャースクールとは一線を画するものであり、コミュニティとしての側面がクローズアップされる部分である。

7.1 飲食の重視——「ともに学び、ともに食べる」

「生活共同体」として最もここで重要視されているのが飲食である。当初、水諭研究室時代まではセミナーが終わった後、メンバーは主宰高美淑のおごりで食事をとっていたという。食事をとりにいった先でまた議論になることもある。おごりをずっと続けていくことの無謀さ、食事のために場所を移動することの不便さがあった。そこで、高は「どうやって食べるか、これを悩みながら楽しく勉強し続けるためには、やはりご飯をおいしく食べなければならない」という結論に達し、移転の際はキッチンのある場所を選んだ²⁷。食事の自給こそが<スユ+ノモ>から現在の南山講学院に至るまで急激な拡大のきっかけであり、食事は研究と同時にこのコミュニティの一番重要な要素であり続けている。「研究と講義に失敗した研究者は許しても、配食に失敗した研究者は許さない」——文聖煥は、食事に関していつも冗談のようにこのような言葉を使い、食事の重要性を訴えているという²⁸。

では、実際にどう配食をしているのかをみてみたい²⁹。献立など、食事の計画は正会員の2人が担当し、毎食の人数把握とメニューを決めている。そして調理は年間プログラム会員の義務であり当番制であるが、希望すれば誰でも担当できる。希望者は月間カレンダーの担当希望日に名前を書いて申請する。報告者が確認したところ、毎食の調理人数は大体4-6人であった。

食材は8割が近隣の賛同者やセミナー受講生、元受講生の寄付で賄っており、食器や調理機材もほぼ寄付である。食材を寄付した人や団体の内訳は厨房横のホワイトボードに記されており、自分たちの食事が誰のおかげで成り立っているかを絶えず確認できるようにしている。メニューは韓国料理であり、魚やドジョウなどは使うが肉は使わない。ベジタリアンに配慮したものであることと、肉の脂で食器が洗いにくくなるのを防ぐためである。

南山講学院では1食2000ウォンで1日3食提供している。朝食は8時過ぎから、メニュー

²⁵ 同上、14頁。

²⁶ 同上、22-24頁。

²⁷ 同上、13頁。

²⁸ 2015年12月3日、文聖煥代表へのインタビュー。以下「文代表インタビュー2015」と記す。

²⁹ 以下、前掲報告書の49頁の内容および、報告者の参与観察データに基づく。

一は前日の夕食の残り物が多い。準備は当日朝簡単にできるように前日夜中にあらかじめ大部分を準備しておく。昼食は大体 11 時から準備を始め、12 時から 13 時のあいだに食べるようになっている。夕食は 16 時頃から準備を始め、17 時以降食べはじめる。ご飯、汁物、惣菜数品、フルーツなどを食べ残し厳禁というルールのもとビュッフェ形式で取る。そしてみな一斉にというわけでないが、大きなテーブルに皆で座ってともに食事をする。文代表は「ともに食べる」ことの重要性を次のように言う。「一緒にご飯を食べる人どうしの関係とは、文字通り家族であるが、実際には知らない者どうし一緒にご飯を食べるというのは容易ではない。だからご飯を共有する関係になるということは、逆にこのコミュニティにどれだけ快適さがあるかということを示している」³⁰。実際、ある程度の仲良しグループで固まっているふしは見受けられるものの、食堂スペースもそれほど広くないため、昼や晩はかなり席を詰めて座らないと全員が座れないため、あまり知らない隣どうしで会話が始まったりする。そのような点でもこの食堂の大きさは、コミュニケーションを広げるには狭すぎず、広すぎず、ちょうどよい空間なのかもしれない。

興味深いのが 3 センチ四方、8 ミリくらいの厚さの小さなパンが毎回置かれており、みなそれを取る。これは単に食べるためだけではなく、食べ終わった食器を各自で水洗いする前に、残飯を綺麗に拭き取るという目的がある。肉類を使わないメニューも含めて言えることは、このコミュニティは食事にこだわるけれども、あくまで主目的は研究共同体であるため、食に時間をかけすぎないという合理性も同時に持ち合わせているバランスの良さがこのような点に見受けられる。

「コミュニティ」という側面からみた食事の重要性は、他にもあげられる。まず、研究共同体において凶らずもできてしまうおそれのある固定的な人間関係を崩せる点であろう。いくら先ほどのセミナーで講師として講義をしたとしても、同じ人間がその後すぐ厨房で食材を切ったり、鍋を洗ったりする。ある時は講師をした後厨房スタッフ、またある時は受講生の後に食事客といったふうに、「毎瞬間、自分が置かれた場所で新たな活動に応じて関係が動的に作られる」³¹ので、必然的に立場が固定しにくくなるのである。次に、食事を担当することによって各メンバーの自主性・責任感の自覚向上効果が期待される点があげられる³²。文代表が「研究と講義に失敗した研究者は許しても、配食に失敗した研究者は許さない」というように、食事当番は自己完結できる個々人の研究と違い、コミュニティメンバーの生活をも担っている。配食に失敗すれば、自分のみならずメンバー全員が食べられなくなる。だから、手が空いたら手伝うといったボランティア感覚では無理だという³³。このように食事には、単に場所を移動せずかつお金をかけずに食べるだけでなく、他のメンバーの責任を負っていることで、コミュニティのメンバーであるという自覚がすぐに生まれるという重要な機能も負っているのだ。

³⁰ 文代表インタビュー2015。

³¹ 文代表インタビュー2015。

³² 文代表インタビュー2015。

³³ 入会の時に、この点については重々に説明するという。

7.2 掃除の重視

食事とともに重要なのが、掃除である。「ここでは、掃除等は勉強する人の基本とされ、家事は生活でもあるが勉強でもあるとしている」³⁴。朝は掃除から始まり、その後に食事、勉強となる。共同研究室の机まわり、食堂、使った皿やコップなど、自分で使ったものは自分で片付けて、私的所有の痕跡を残さないようにするのが基本である。また、週に 2 回は全員で施設内の掃除をすることとなっている。「どうやって循環する身体性に変えることができるのか。ご飯を一生懸命に作って、掃除を一生懸命にしなければなりません」――申才恩は、食事と掃除の重要性をこのように研究と結びつけている³⁵。

7.3 一部メンバーの、シェアハウスでの共同生活

このコミュニティの特徴として他に、一部のメンバーが南山地区近辺にある複数のシェアハウスで生活していることが挙げられよう。男性寮が 1 つ（「コムハウス」と呼ばれていた）、女性寮は 3 つである³⁶。少なくとも男性寮に関しては、生活者の私物はほとんどなく、物置として使っている 1 部屋に各自の着替えおよび学習道具が部屋の端に置いてあり、おそらく共同使用の机と椅子が 1 ペアあるのみであった。他の部屋は布団と壁の本棚に本が並んでいる程度であった。ここでも私的所有、専有を忌避するコミュニティの精神があらわれているといえよう³⁷。2014 年 12 月時点では 4 部屋に 7 人が住んでいたが、2015 年 12 月時点では 2 人であった。男性寮女性寮ともに宿泊費は 1 泊 5,000 ウォン、家賃 20,000 ウォン³⁸で、独立生計が難しいメンバー、地方から出てきたメンバーが使用している。シェアハウス内では料理および食事は禁止である。ここはまた、南山講学院で遅くまで過ごしたメンバーの宿泊施設や、客人のためのゲストハウスの機能も担っている。

7.4 コミュニティの規則について

これだけの「特殊な」コミュニティであれば、どのような規則があり、メンバーはそれをどのように守っているのであろうか。興味深いことに、文代表によると規約はないという。実際、以前会員規約を作成したことはあるが、ほとんど意味がなかったとのことであり、それから規約は作成していないという。また、運営会議においてコミュニティの行動や指針を「決める」ことはしばしばであるが、会議では無理に決定するという方針はとらず、「中で話し合い、お互いの考えを知り合う」ことでものごとが自然と合意されていく「決まる」方を重視している³⁹。

³⁴ 前掲報告書、49 頁。

³⁵ 同上、23 頁。

³⁶ 前掲報告書、50 頁。報告者も 2014 年 12 月、2015 年 12 月の滞在時にこの男性寮に宿泊した。

³⁷ なお個人的な印象であるが、男性寮内では共同生活なのに各自（私有）のウォン札がむき出しで置いてあるのが興味深かった。どちらの滞在時もそうであったので、おそらくここではこれが一般的なのであろう。

³⁸ 男性にはカミダンからの奨学金があり、毎日研究室の解錠施錠を行ったり、カフェ運営などの実労働をする代わりに家賃は払っていない者もいるという。前掲報告書、50 頁。

³⁹ 文代表インタビュー2014。

またメンバーの呼称に関しても、<スユ+ノモ>時代は一律「研究員」という呼称をしていたが、南山講学院では正会員とその他の会員の違いがあれど、代表の文聖煥以外は意識的に「会員」としかしておらず、固定的な序列は作っていない⁴⁰。

このように、規則でメンバーを縛ったり、呼称で序列を固定化したりせずとも少なくとも現時点ではこのコミュニティは問題なく運営されており、メンバーどうし食事と掃除に責任を持ち、私有概念から離れ、平等に学ぶという個々人の自律性を強く信頼していることが分かるだろう。

VIII 「文化活動」の役割——「学術祭」

ここまでを見ると、このコミュニティはとてもストイックに生活し、ストイックに研究活動を続けているように見える。たしかにそうであるが、生活および研究以外の活動はどのようなものがあるのだろうか。報告者は今回このコミュニティにおける「文化活動」あるいは「レクリエーション・娯楽」に注目した。ここでは奇しくも2015年12月初旬にここで年1回行われる「学術祭」の様子を観察することができたので、最後にその模様について報告したい。

「学術祭」とは南山講学院で例年12月初旬に行われている、1年間の研究を集成する行事であり、2015年は12月3日から5日までの3日間開催された。基本は「研究発表会」であるが、それだけでなく、同じ空間であっても生活や受講プログラムが異なり一緒に勉強する機会がなかったメンバー間で、お互いの研究を確かめ合うという場でもあり、また、南山講学院というコミュニティを知らない一般の人達にも開放されているので、外部に対してはコミュニティの門戸開放の機会となっている。

2015年の学術祭のプログラムはこのようなものであった。

12月3日

14:00 : Talk Talk～生年月日占いについて

15:00 : ビンゴゲーム (-17:00)

19:00 : 陽明学について

12月4日

14:00 : 卓球大会・予選

16:30 : MVQ (Moving, Vision, Question) :

: 一部メンバーの『紅樓夢』学習ツアー報告会

19:00 : エッセイ発表会

⁴⁰ なお、<スユ+ノモ>時代のコミュニティをまとめた金友子編訳の『歩きながら問う——研究空間<スユ+ノモ>の実践』の著者略歴をみても、「古典評論家」や「プロレタリアート」、「会員」、「大学教員」（准教授、教授などではなく）などとしており、いわゆる「序列」を含む肩書は意図的に排除されているようだ。この精神は南山講学院にも受け継がれている。

20:00 : 高美淑氏講演会

12月5日

13:30 : 卓球大会・本選

15:00 : 孔子朗誦大会（他団体も合同）

19:00 : 歌謡祭（男性4人による K-POP 歌唱）

このように、基本的には会員の「研究発表会」であるが、それだけではなくビンゴゲーム、卓球大会、歌謡祭と、かなりレクリエーションの要素も取り入れてあるのが分かるだろう。いわゆる学校の「文化祭」、「学園祭」に近いものにとらえればよいだろう。卓球大会と歌謡祭は完全にレクリエーションの範囲であるが、ビンゴゲームはメンバーのこれまでの学習内容を含んだ形で行われる興味深いものであったので、一例としてこのビンゴゲームを取り上げてみたい。

このビンゴゲームの方法は以下のとおりである。まず縦6マス横6マス、計36マスを書いた模造紙に45までの数をランダムに書き入れる。それを6チーム分作り、各チーム（1チーム3人）の後ろに掲示する。各チームはそれぞれ自分たちの順番に、自分が消したい番号を司会者（文代表）に告げる。その番号は実は問題番号で、司会者がその番号札に書かれている問題を出す。問題は、過去1年南山講学院で学習した内容から出される。そしてそのチームが正解したら、問題を問いたチームはもちろん、自分たちの順番を待っている他のチームも該当するビンゴの番号を消すことができる。あとはタテ・ヨコ・ナナメのどれか1列が消えれば勝ちという、通常のビンゴゲームの形式に則っている。そして、一番列が多く消えているチームから順に賞がもらえるようになっているのもまた通常のビンゴゲームと同じである。これは2015年の学術祭が初の試みだったらしく、大成功だったので今後も続けたいと考えているようだ⁴¹。

IX まとめと今後の課題

韓国には他にもこのような学術コミュニティがすでにいくつか存在するという⁴²。この「新しい学術コミュニティ」を調査するにつれ、これは本当に「新しい」学術コミュニティなのか、という疑問が出てきている。というのも、もしかすると彼らも意図せずに寺子屋、カフェ談義、近代以前の私塾といったグループに近づいていっているのではないかとも考えられるからだ。逆の言い方をすると、近代以前に存在した形が南山講学院で意図せず、「新たに」生まれたのではないかとも考えられる。今後の課題としては、この近代以前の学習グループの精査から、南山講学院との類似性を照射してゆくことが必要であろう。

⁴¹ 文代表インタビュー2015。

⁴² 前掲の報告書によると、5つくらい存在する、としている（51頁）。実際、2015年12月、報告者による会員へのインタビュー調査でも春川市の学術コミュニティから南山講学院へ移ってきたというメンバーが存在していた。

また、本研究は基礎研究であったゆえ、コミュニティの大枠をとらえ、その特徴を検討分析することに終始したが、今後はコミュニティメンバー個々のアイデンティティやモチベーション、コミュニティの社会的影響についても調査検討する必要があるだろう。これらを総合してはじめてアカデミー制度圏外の学術の姿が照射されるのではないかと考えている。

参考文献

金友子編訳『歩きながら問う——研究空間〈スユ+ノモ〉の実践』、インパクト出版会、2008年。

平成 25・26 年度 東京学芸大学連合学校教育学研究院生連携研究プロジェクト報告書『生活共同空間としてのコミュニティと文化形成の関係性に関する共同研究』、

http://www.u-gakugei.ac.jp/~graduate/rengou/kyouin/topics/data_project_h25/b-5.pdf

(2016年1月29日確認)。